

(6) 明治時代

明治になって東京遷都が行われると、京都は首都としての機能を失い、空洞化していった。この危機的な状況を打開するため、積極的に近代化への事業や政策が実施された。

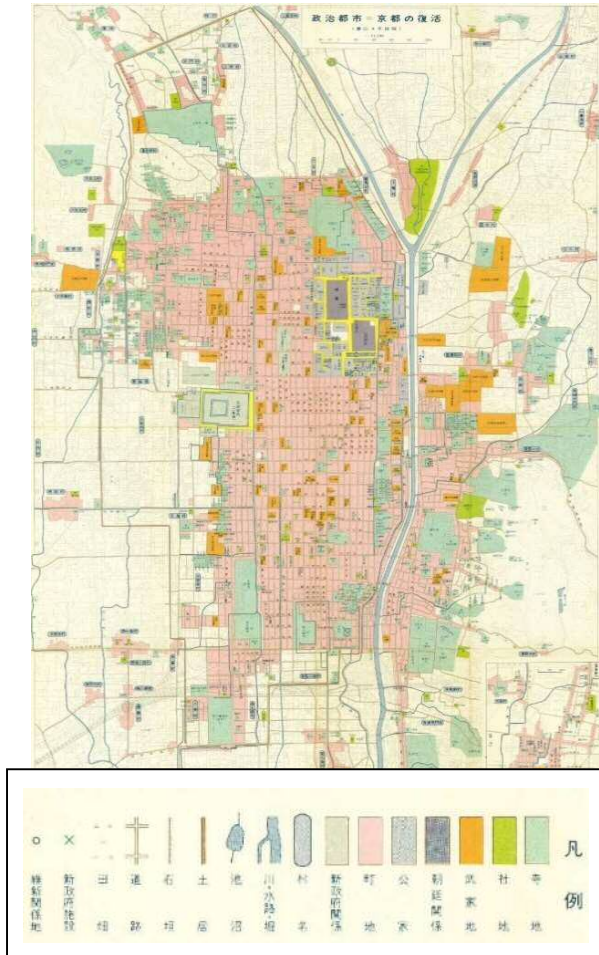


図1-14 慶応4年（1868）頃の様子 出典「京都の歴史7」

第3代京都府知事の北垣国道が推進した琵琶湖疏水事業は、明治23年（1890）に竣工し、翌年には疏水を利用した日本発の一般供給用発電所（蹴上発電所）が完成し、京都の町に電力が供給されるようになり、疏水は京都の近代化を一身に担うものになった。

一方、疏水運河の完成は、直ちに高瀬川の船運に影響を及ぼすことはなく、鴨川運河は開かれても、高瀬川は薪炭肥料など日用品、新運河は山陰・北陸方面の石材・石炭・木材などの諸物資の輸送と、水路の機能が分化された。

明治28年には、この電力を利用して日本初の市街電車が開通した。

明治31年に、市政特例（東京・大阪とともに府知事が市長を兼務する）が廃止され、京都に初代市長・



写真 1-14 現在の蹴上発電所(非公開)

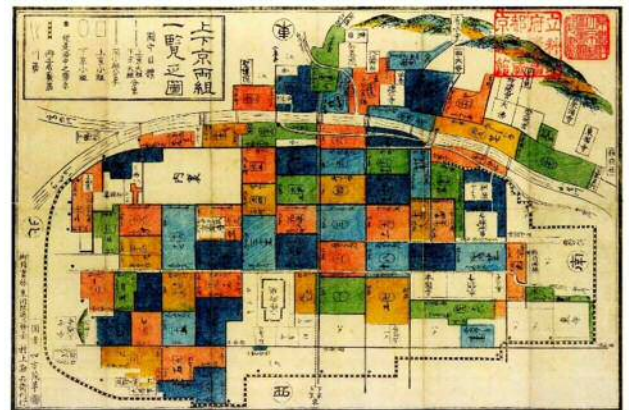


図 1-15 京都町組みの新編成（上下京兩組一覽之図）

京都府立総合資料館 所蔵

内貴甚三郎が就任すると、明治41年から第二疏水の建設、上水道の建設、道路拡張の三大事業が着手されるなど、近代都市としての都市基盤整備が行われていった。

日露戦争中には、深草に陸軍第十六師団が設置され、兵舎、兵器支廠^{ししょう}などができ、京都駅と師団を結ぶ軍用道路として師団街道が敷設された。

一方、室町時代から受け継がれてきた町組は、京都府により上京・下京各33組に組み替えられた。各番組では小学校の建営を決定し、明治2年に64校の小学校が開校した。この小学校は町組の会所兼小学校として発足し、「番組小学校」と呼ばれる。

また、慶応3年（1867）には、すでに幕府領の収公が始まり、明治2年には他の藩領も新政府に奉還されたが、明治4年、最後に残された寺社領の整理がおこなわれ、境内を除く寺社領が、続く8年には、宗教活動や祭礼に用いられる境内地、社叢^{しゃそう}などごく周辺の山林および寺社の買収地などを除くすべての土地が、収公された。この上知令は、各地に点在する広大な寺社領に加え、京都周辺に多くの境内地を有していた大寺社にとって、経済的基盤を根底から覆すこととなった。